

青少年野球における投球障害の 現状と予防の歩み

日本のスポーツ界の歴史の中で、高校野球は春夏の甲子園球場で名勝負を繰り広げて国民に愛されてきた。私たちは故郷の代表として炎天下で歯を食いしばりながら投げ抜く投手の姿に共感し、そこにいつまでも変わらない価値を見出していた。そしていま、高校野球が変わろうとしている。日本高等学校野球連盟（日本高野連）が投手の球数制限という新たな取り組みとともに、青少年野球のあり方を次のステージへと導こうとしている。

その背景にあるのは小中学生の野球少年に起きていた投球障害の問題であった。強くなることを優先する指導者と過剰な期待を求める保護者の中で、まだ未熟な骨格や不完全な投球動作しか持ち合わせない子どもたちがどれほど傷つき、その夢や才能を失っていたのだろうか？

日本高野連が動き始めた球数制限の意義は、単に高校球児に向けられたものではないはずである。それは多様な社会の中で野球を選んでくれた子どもたちへの慈愛であり、そこに関わる指導者・保護者すべての大人たちへの警鐘である。選手が故障することなく健全に野球を楽しみながら夢の甲子園の舞台を目指してほしいというメッセージが込められていることを感じる。

今回の特集では高校野球の球数制限という視点から投球障害について病態、診断と治療、手術、疫学と予防、バイオメカニクスの基礎研究まで専門的かつ情熱をもって様々な活動をされている先生方に寄稿いただいた。また長年にわたって高校野球が取り組んできた選手のケアの理念、各野球連盟と深い接点をもって医療支援活動をされてきた状況も紹介いただいた。今回の大きな変革が多くの先生方の地道な活動によって前進したものであることを改めて感じる。

もちろん球数制限だけでは解決しない問題があることは理解している。しかし球数制限という誰もができる小さな行動を切り口にして、青少年の投球障害予防のみならずスポーツ障害予防の全体について垣根を越えて議論が進む可能性を期待する。

振り返ると私たち整形外科医を中心に、医療側からの成長期の投球数の適正化は1990年代から提言がされていたが、その声は野球界に十分届かなかった。日本の未来に向けてスポーツ医学の改革が医療者とスポーツ現場の相互理解と協働によって進むことを願う。

(山本智章)